～唐津城石垣再築整備事業に伴う文化財調査～

「唐津城跡」本丸文化財調査 現地説明会　平成22年10月3日（日）

☆文化財調査成果のポイント☆

①明らかになった唐津城本丸の様子

江戸時代に築かれた２つの櫓台や、石垣の端に造られた石塁や石段を新たに確認しました。塀を支えるための控柱の抜き跡と思われる柱穴列も見られ、多くの遺構が良好に残っていました。

②重ねられた修復や改変

石垣石材や裏の栗石、盛土の状況が場所によって全く異なっています。これと対応するように、石塁や石段の状況も異なっており、江戸時代に数回にわたる修復や改変が行われていたことが明らかになりました。

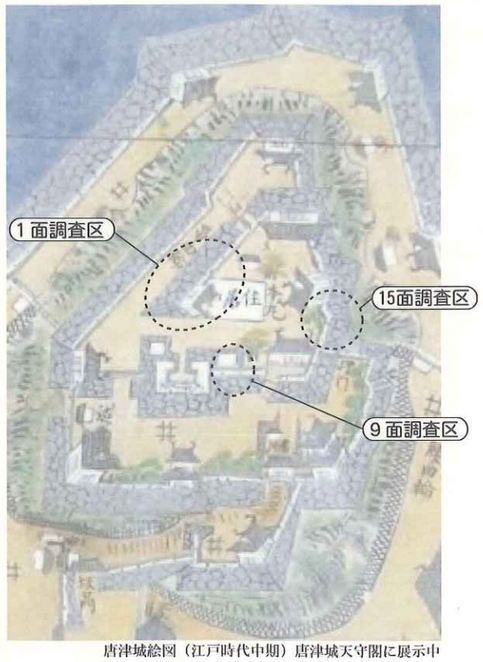
③唐津城築城期の石垣の発見

江戸時代終り頃の遺構面よりさらに下層から、石材や積み方が異なる石垣の一部が見つかりました。これこそ江戸時代の初めに唐津藩初代寺沢氏が築いた石垣と考えられます。また、この石垣を完全に埋めて、別の場所に石垣を築いていることから、400年前の築城期の唐津城本丸が、場所によって今とは異なる形状であった可能性が考えられます。

○調査に至る経緯○

唐津城の石垣は築城されてから400年が経過し、石材の劣化や石垣の孕みなどが目立つようになってきました。平成17年には、石垣修復の専門家から崩落の危険性が改めて指摘され、唐津市では約３年をかけて総合的な調査を実施することとなりました。またそれと並行して専門委員会を立ち上げ、土木や石垣修復など様々な視点から、修復の方向性や方法についての検討を重ねてきました。

その成果を受けて、平成20年度から石垣再築整備事業が始まりました。まず15面調査区（15面上段・下段石垣とその掘削予定範囲）を対象に平成20年10月から事前の発掘調査を、平成21年3月から6月まで15面上段・下段石垣の解体を行い、今後の石垣修復に必要な仮設作業道を設置しました。平成21年10月からは１面調査区（1～3面石垣とその掘削予定範囲）の発掘調査に着手し、平成22年4月から石垣の解体工事を行っています。さらに平成22年5月から９面調査区（９面石垣とその掘削予定範囲）で発掘調査も行っています。



唐津城絵図（江戸時代中期）唐津城天守閣に展示中

○唐津城の概要○

唐津城は、寺沢志摩守広高により、慶長七年（1602）から慶長十三年（1608）に築城されたと伝えられています。その形は、唐津湾を臨む満島山を本丸とし、南西に広がる砂丘上に二の丸、三の丸を配置したもので、三の丸の周囲には城下町が造られました。満島山を中心に、虹の松原と西の浜一帯の松原が弧を描いて東西に広がっている姿から、舞鶴城とも呼ばれています。

寺沢広高は、唐津城築城に並行して、松浦川の改修・虹の松原の植林・新田開発を行い、現代に通じる近世唐津の基礎を造りました。また、天草の富岡城築城をはじめ、近年では唐津市厳木町にある獅子城も大改修を行っていたことが明らかになり、地域の拠点づくりにも尽力しました。このころ寺沢氏は12万3千石を領する外様大名へと成長していきました。

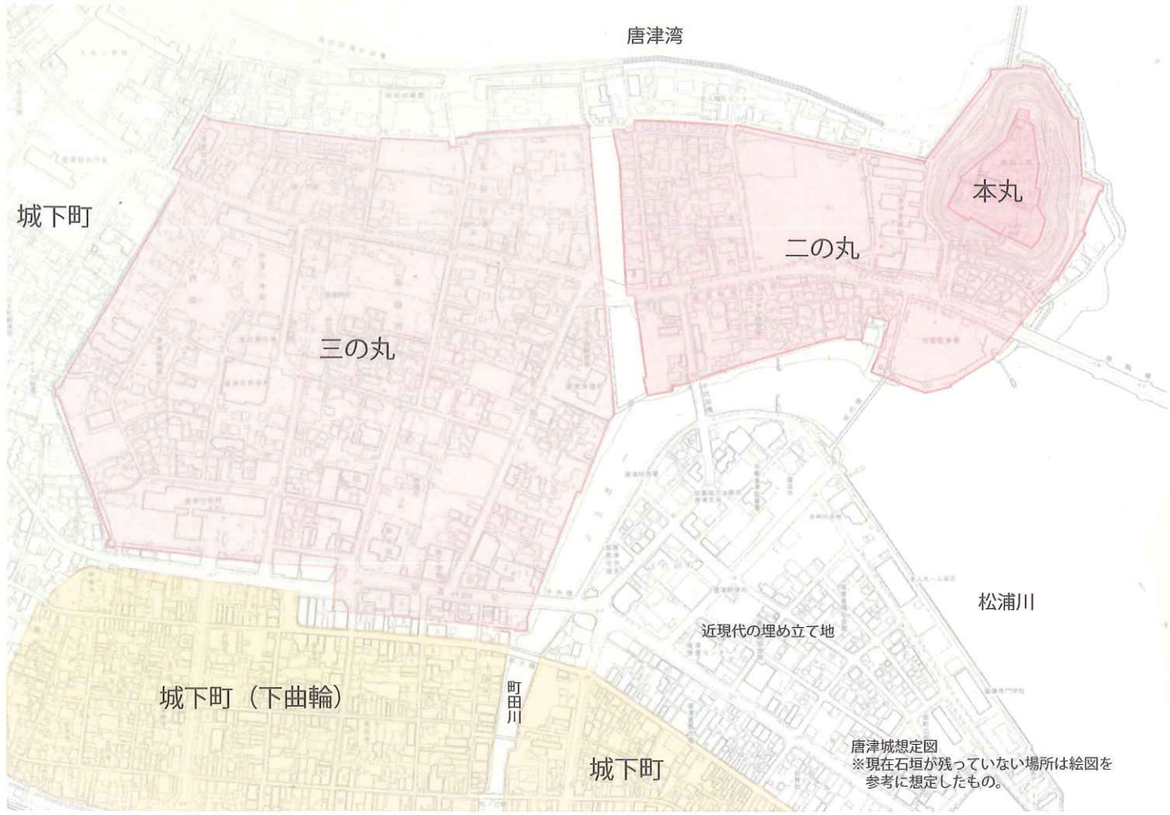
しかし、寛永十四年（1637）に起きた島原の乱の責任をとり、天草郡4万石が没収されました。さらに、嗣子がいなかった寺沢堅高が正保四年（1647）に自害すると、寺沢家は断絶、改易となり、一時唐津藩は天領となりました。

その後、譜代大名の大久保、松平、土井、水野、小笠原と五つもの家が転封を繰り返しています。唐津藩は、長崎警護を担当した佐賀藩と福岡藩の目付役として重要な任務があり、これらの外様大名を監視する譜代大名がこれにあたったようです。

その後明治維新を迎え、明治四年（1871）の廃藩置県により、唐津藩はその歴史に幕を閉じるのです。明治十年（1877）には舞鶴公園として整備、昭和四十一年（1966）に模擬天守が建設されて現在に至っています。

唐津城関連の主な出来事

1591（天正19年）	肥前名護屋城築城開始。
1592（文禄元年）	肥前名護屋城完成。文禄の役開戦。
1593（文禄２年）	文禄の役終戦。
1594（文禄３年）	波多三河守親、改易。
1595（文禄４年）	寺沢広高、唐津に入封。
1597（慶長２年）	慶長の役開戦。
1598（慶長３年）	豊臣秀吉死去、慶長の役終戦。
1600（慶長５年）	関ヶ原の戦い。
1602（慶長７年）	唐津城築城開始。
1603（慶長８年）	江戸幕府が開かれる。
1608（慶長13年）	唐津城完成。
1615（慶長20年）	大坂夏の陣。
1637（寛永14年）	島原の乱勃発。
1647（正保４年）	寺沢堅高自害。寺沢家断絶、改易。
1648（慶安元年）	一時天領となる。
1649（慶安２年）	大久保忠職、播磨明石藩より入封。
1678（延宝６年）	大久保忠朝、下総佐倉藩へ転封、 松平乗久、下総佐倉藩より入封。
1691（元禄４年）	松平乗邑、志摩鳥羽藩へ転封、 土井利益、志摩鳥羽藩より入封。
1762（宝暦12年）	土井利里、下総古河藩へ転封、 水野忠任、三河岡崎藩より入封。
1771（明和８年）	虹の松原一揆。
1817（文化14年）	水野忠邦、遠江浜松藩へ転封、 小笠原長昌、陸奥棚倉藩より入封。
1867（慶応３年）	大政奉還。
1869（明治２年）	版籍奉還。小笠原長国、藩知事となる。
1871（明治４年）	廃藩置県。小笠原長国、免官。 幕藩体制の崩壊、唐津城廃城。
1873（明治６年）	廃城令。唐津城破却か。
1877（明治10年）	舞鶴公園として整備。
1966（昭和41年）	本丸天守台に模擬天守建設。
1989（平成元年）	三の丸（市役所前）の肥後堀整備。
1992（平成４年）	二の丸に時の太鼓建設。
1993（平成５年）	三の丸に辰巳櫓建設。
2008（平成20年）	唐津城石垣再築整備事業開始。



唐津城想定図
※現在石垣が残っていない場所は絵図を参考に想定したもの。

1面調査区（1～3面石垣）

○1～3面石垣と1面調査区

1面石垣は本丸の北西に南北にのびる石垣です。石垣の中ほどで、不明瞭な石垣の折れ目（シノギ角）があり、南端で鈍角に折れて2面石垣へとつながっています。さらに2面石垣の南端で直角に折れ曲がり、3面石垣へと続いています。

1面石垣の下には、幅約2mの犬走り（通路）があり、犬走りの下には1面石垣と平行に延びるもう一段の石垣が続いています。下の石垣は急傾斜上に築かれており、築城の際は難工事であったと考えられます。

これらの石垣は、孕みや石材の割れにより劣化しており、特に1面南側と2面石垣では大きく膨れ出ていました。

これらの石垣を解体し積み直すために、2・3面石垣の上に建てられていた収蔵庫を解体し、石垣を解体するために必要な範囲で発掘調査を行いました。また、石垣解体工事に着手してからも、並行して文化財調査を行い、石垣裏の栗石層や盛土の中から出てくる遺構や遺物を調査しています。

このような調査により、重要な遺構や遺物を確認し、江戸時代の唐津城の様子が明らかになってきました。

櫓台（やぐらだい）

2・3石垣の内側から、新たに石垣を検出しました。この石垣は2・3面石垣と平行になるよう並んでいます。新たに見つかった石垣と2・3面石垣で囲まれた範囲は、南北9．5m、東西7．5mの長方形になっています。江戸時代にはこれらの石垣が櫓台となり、この上に櫓が建てられていました。その様子は江戸時代の絵図にも描かれています。もともとは石垣を用いて周囲よりも高くなるように造られていたようですが、石垣の最も下の石材（根石）しか残っていません。明治初期の廃城時または、公園化する際に、石垣石材の大半が取り外されたようです。櫓台全域で石垣の下の土がすべて入れ替えられていることから、築城後に数回にわたる改修を経て現在の形になったようです。

櫓台の様子（北東から）

石墨（せきるい）

1面石垣面から1．2～1．8m内側から、1面石垣と平行に、背を向ける様に並んだ石垣が見つかりました。これにより、石垣の際を一段高くする石墨が本丸の西側全域に広がっていたことが明らかになりました。

石墨内面の石垣は、北側・中央・南側で石材の大きさや加工の度合い、積み方が異なっています。北側では、控えが短いためやや扁平に見える自然石を用いています。ほぼの同じ大きさの石材なので、石材間の目地を整えようとしたようです。中央でも自然石を用いていますが、石材の大小の差が激しく乱積みで仕上げています。南側では、ほぼ同じ大きさに割った割石を用いているため、横方向に目地が通っています。

この変化と対応するように、石墨幅も変化していることから、数回にわたり石垣が積みかえられたと考えられます。

石墨の様子（東から）

1面調査区遺構平面図（S=1/100）

溝状遺構（みぞじょういこう）

現代盛土の直下から、石を溝状に並べて造った溝状遺構を確認しました。土層の状況から、江戸時代の終わりから明治の初め頃に造られたと考えられ、周辺には建物の礎石らしき石材も見られます。

溝状遺構（東から）

旧石垣（きゅういしがき）

調査区北側の104号石段や石墨より下層から新たに石垣を検出しました。この旧石垣は、1面石垣から約3m内側に、南北約3mの範囲でほぼ平行に延びています。石垣の最も下の石である根石しか残っておらず、上に積まれていた石材は取り外されたようです。

1面調査区の南側では、造成土（石垣の裏に入れられた盛土）が数回入れ替えられており、元々の土ではなく砂や石混じりの土が広がっています。これに対し、調査区に北側には築城当時の造成土がみられ、この造成土の上に旧石垣が据えられています。つまり、唐津城築城当初は、今回の調査で確認した石墨はなく、1面石垣と旧石垣により櫓や塀等の建物が造られていたと考えられます。江戸時代に、この旧石垣を大きく破壊し、土を被せてその上にまったく異なる形状の石墨に造り替えたようです。

このように、唐津城本丸では江戸時代に石垣を積みなおす程の補修や改修が数回にわたり行われたことが明らかになりました。さらに、この旧石垣こそが唐津藩初代の寺沢氏が最初に築いた石垣と考えられます。旧石垣の発見は、謎が多い唐津城築城期の様子を知るための重要な手がかりと言えるでしょう。

検出した旧石垣（南から）

旧石垣南側〔左〕と北側〔右〕（南東から）

石段（いしだん）

石段は4ヶ所で確認しました。これらの石段は、一段高い石墨へ上がるための階段です。北から、104～107号石段と呼んでいます。

4つの石段は、その石材の大きさ、加工の度合い、段数、積み方が異なっています。さらに、石段が置かれた土層の面も違うことから、造られた時期が異なるようです。石墨・1面石垣は、場所によって積み替えられていることから、石段もこの積み替えにより造りかえられたのでしょう。

107号石段（南西から）

柱穴列（控柱跡）（ちゅうけつれつ　ひかえばしらあと）

石墨内面の石垣より下から、柱の穴を7つ確認しました。北から、109-1～109-7と呼んでいます。それぞれ1～2mの不整形で、石墨に沿って3m間隔で並んでいます。

これらの柱穴は、石垣の際に建てられた塀を後ろから支える控柱の跡と考えられます。柱を抜く時に、柱の周辺を掘り返したため、北側の109-1と109-2ではつながってしまうほどに形が乱れています。109-6では、柱の周囲を掘る前に引き抜くことが出来たようで、柱を抜いた時の丸い形がそのまま残っていました。

柱穴列
完掘状況
（北から）

9面調査区（9面石垣）

○9面石垣と9面調査区

9面石垣は本丸の南側で東西にのびる石垣です。石垣の西端は天守台石垣へとつながり、東端は櫓門へと続いています。櫓門から、9面石垣下に広がる二の曲輪（中段広場）と呼ばれる平坦面を通って二の丸へと大手道がつながっています。

9面調査区は、この9面石垣を解体す為に必要な掘削範囲が対象です。調査前には売店とトイレが建てられていました。

ボーリング調査により、元々の地形は天守台と櫓門の間に、南北に延びる細い谷筋があったようです。9面石垣はこの旧谷筋の上に直交するように築かれています。

1面石垣と同様に、9面石垣も孕みや石材の割れにより劣化しているため、石垣の修復を行います。現在、事前の発掘調査を終え、これから石垣の解体へと移っていきます。

9面調査区でも、様々な遺構や遺物が新たに見つかりました。

天守台石垣（てんしゅだい いしがき）

唐津城では天守台の石垣は残されているものの、この上に天守閣が建てられていたことを伝える資料は残されていません。古文書や絵図によると、江戸時代を通して天守台のみが描かれており、天守閣は建っていなかったようです。

発掘調査では、土に埋もれた天守台の石垣を部分的に検出しています。天守台石垣は、同じ質の花崗岩をほぼ同じ規格に割った石材を用いています。しかし、土に埋もれていた部分の石垣は石材の色や粒子・規格が様々で、自然石も使用するなど、その状況が異なっています。

1面調査区の旧石垣のように、築城期の石垣を積み直している可能性も考えられ、今後の石垣解体時の調査が期待されます。

天守台石垣（北東から）

櫓台（やぐらだい）（付櫓（つけやぐら））

9面石垣の内側から、新たに石垣を検出しました。この石垣は9面石垣・天守台石垣と平行になるよう並んでいます。これらの石垣は櫓台の石垣で、その範囲は南北6．8m、東西10．2mの長方形になっています。この櫓台は天守台にすり付けるように築かれていることから、天守台の付櫓と考えられます。

江戸時代の絵図をみると、天守台石垣のように櫓台石垣だけが描かれており、建物の付櫓は描かれていません。天守台と同じように、付櫓の櫓台石垣だけを築いて付櫓を建てなかったのか、一度建てた付櫓を取り壊したのか。いずれにしても、天守台と連携する施設として築かれたと考えられ、築城期の唐津城の様子や建てられなかった可能性が高い天守閣の謎を探る上でも、重要な発見となりました。

櫓台の様子（北東から）

石墨（せきぼく）

9面石垣面より約2．5m内側から、9面石垣と平行に並んだ石垣が見つかりました。1面調査区や、昨年調査した15面調査区でも石垣の際に石墨を確認しており、本丸の全域に石墨が廻っていたようです。

しかし、場所によりその状況は様々です。1面調査区の石墨と比べると、その幅は広くなっています。15面調査区の石墨は同じ幅ですが、内面の石垣石材が15面調査区では自然石を多く使用していたのに対し、9面調査区では割石を使用しています。

石墨の様子（西から）

石段（いしだん）

石墨西端の延長線上、櫓台との接合部分で、3段の石段を検出しました。長さ180cmと90cmの石材を交互に組み合わせていますが、取り外されたためか、石材が残っていない場所も見られます。上の石材を受けるために段差を造るなど、各石材は丁寧に加工されています。石段は陥没により東へ大きく傾いていました。

調査区東端の石墨上でも石段が見られます。この石段は1段しか残っておらず、上面を平坦に整えてはいるものの、石材の大きさは整っておらず、3段の石段ほど細かく加工されていません。

3段の石段（北から）

1段の石段（北から）

9面調査区遺構平面図（S=1/100）

廃棄坑（はいきこう）・撹乱（かくらん）

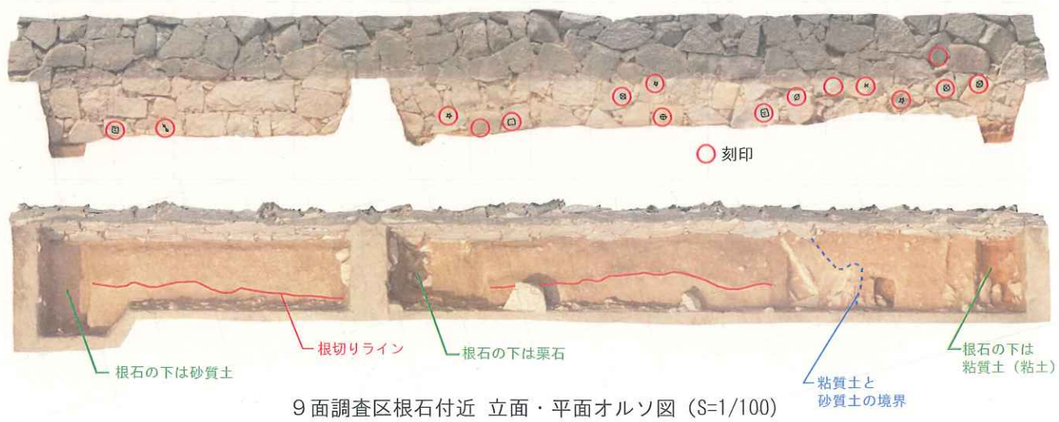
9面調査区では、昨年まで建っていた売店・トイレの基礎をはじめ、現代に掘られた撹乱が密集していました。江戸時代の遺構面からも深さ1m以上掘られた穴が見つかりました。SX902やSX904では江戸時代の瓦が大量に出土しており、幕末～明治初期に割れた瓦を捨てた廃棄坑と考えられます。

SX902の半分を掘り下げた状況（北東から）

根石（ねいし）付近の様子

9面石垣根石付近では、根切りを行った様子が確認されました。根きりとは、根石を据えやすくし、石垣を安定させるために、根石を据える場所を掘ったり削ったりすることです。石垣から約1m前から斜めに掘りこんでいました。

また、石垣の下が、西から粘質土・栗石・砂質土と変化していました。地山の粘質土を平坦に削り、旧地形で谷筋にあたる部分に栗石や砂質土を入れたようです。



9面調査区根石付近 立面・平面オルソ図（S=1/100）

長年土で保護されていた石垣面では、多くの刻印を確認しました。様々な刻印か刻まれており、丸に十字〔⊗〕、星〔☆〕、四角形に「三」〔三〕、眼鏡形〔∞〕をはじめ、判読できないものも含めると、数種類が見られます。

石垣に残された刻印は、石垣普請を担当した藩や家臣・石工を示す場合がありますが、唐津城ではどのような理由で刻まれているのか、分かっていません。唐津城内でこれほど密に刻印が残されている場所は今まで確認されておらず、石垣普請やその石材の供給を知る手がかりとなるかもしれません。

根石付近の根切り（西から）

石垣解体工事と文化財調査の様子

１面調査区石垣解体の様子（北から） ※左から３段目、６段目、１４段目石材解体状況

４ｍ程の高さの１～３面石垣を17段に分け、１段毎に調査しながら解体工事を進めています。現在１４段目まで石材を取り外しました。解体が進むにつれ、石垣石材の大きさや加工の度合い、積み方に変化が現れます。さらに、石垣裏の栗石の材質や規格、盛土の状況も、場所によって異なっています。

１面石垣裏の盛土（北西から）

１面調査区の遺構面の下の盛土は場所によって質が異なっています。江戸時代の石垣の積み直しに伴い、調査区南側は盛土が入れ替えられたようです。

控柱の抜き跡（南から）

109号柱穴列の南から２番目(109-6)では、控柱を引き抜いた状況を確認しました。柱の周りを砂混じりの粘土で固めていたため、円筒状に粘土が残っていました。抜く時に柱を倒したのか、穴が東側に引っ張られたような形です。

出土した鬼瓦

１面調査区の109-3上層から、桃をかたどった鬼瓦が出土しました。

出土した宝篋印塔

１面調査区石垣解体時には、栗石の中から宝篋印塔や五輪塔等の石塔が出土しました。

出土した金箔瓦

９面調査区現代撹乱層から、かすかに金と赤漆が残る金箔瓦が出土しました。

９面調査区発掘調査の様子（北から）

東西、南北に延びる溝状の掘り込みは、現代建物（売店・トイレ）の基礎の跡。江戸時代の遺構面の下、比較的粘性が強い砂質土が10～20cm程堆積しており、さらにその下には海砂が広がっています。

９面調査区の瓦堆積層（北西から）

江戸時代の遺構面の上では、調査区全域で瓦の破片が堆積した層が広がっていました。明治初期の廃城時に廃棄されたもののようです。

９面調査区　天守台東面石垣

天守台の石垣はほぼ同じ大きさの割石を用いています。しかし、地中に埋まっていた石垣石材は、大小様々で自然石も用いており、その様子が異なっています。